

日本コンクリート工学会（JCI）年次大会「コンクリート構造物診断セミナー」に参加して

本年7月5日からJCI年次大会が福岡市で行われました。そこでは第3回コンクリート診断セミナーが開催され、TCDからは星野富夫と小林剛が参加、聴講しました。今回のテーマは「道守」（みちもり）養成講座15年のあゆみと道守養成ユニットの会活動事例」というもので過去2回の診断セミナーと多少異なり、官・民・学連携してのコンクリート構造物診断に対する取り組みを紹介するというものでした。報告は長崎大学、宮崎大学、建設コンサルタント、長崎市の担当から行われ、その後パネルディスカッションで意見交換がありました。

報告では、①「道守」とはどのようなものか、②その活動内容、③“道守”養成講座コース内容の紹介がありました。「道守」の概要としては、インフラの長寿命化を目指し、「官」である長崎県、長崎市。「民」として建設業協会、コンサルタント協会、市民団体、「学」として長崎崎大学、宮崎大学などが共同して「道守補助員」、「道守補」、「道守」の養成講座を開催し、これらの人材を認定する。認定された道守補は点検を、道守は点検・診断に従事することができ、その資格は国土交通省の「民間資格」に登録されているというものです。なお、活動詳細はインターネット [長崎大学 道守養成ユニット \(michimori.net\)](http://michimori.net) をご覧ください。

私の感想

道守という活動が起こる背景としては、①財政・予算が不足する中でのインフラ整備（カネの問題）、②知識と経験が豊富な維持管理技術者が不足している（ヒトの問題）、③効果的・効率的技術の継承（モノ、技術の問題）これらがあると考えます。特にこれらは地方自治体で深刻です。例えば、橋梁数は全国で70万橋以上有りますが、その80%以上は地方自治体が管理しています。また、国土交通省の資料でも土木予算の減少、インフラ設備を担当する職員の不足が報告されています。私たちTCDが活動している都会での課題・問題と、地方での課題・問題は差があることを感じています。今後、わが国の社会資本の老朽化が進み点検・診断・維持管理の課題・問題はさらに増していきます、そして地方ではさらに深刻です。今後、道守の活動のような形態が増加していくことは予想できます。

コンクリート診断士と道守

道守が生まれる背景と意義について理解できますが、そのリスクについても考えてみました。道守となるためには、養成講座と点検演習などを受けます。その後認定試験を受け合格者に資格を与えるものです。懸念するのは、比較的短期の養成講座などで技術的に至らない水準で資格者が生まれ、リスクとして実際の点検・診断に対して満足した成果を得られない場合があるのではということです。この点では会場参加者からも質問がありました。それに対する回答は「専門的技術者であるコンクリート診断士の方などに相談・指導していただく」というものでした。

私は、社会資本インフラ設備の点検・診断の分野でのコンクリート診断士と、様々な形態での民間組織の連携した活動は必要であると思います。その際、専門的知識と技術を持つコンクリート診断士がその中心的役割を果たすことが重要であるとも考えているところです。